

日蓮聖人に於ける現生利益の問題

上 田 本 昌

—

最近の新興宗教諸団体に於いては、現生利益の問題が極めて重要な位置をしめてゐる。其の実態は幼稚であり、又迷信的な場合も少なくないのであるが、大戦後既に十余年を経て、人心の落着きを取りもどした今日に於ても、依然として既成宗教を凌ぐが如き勢力をもつて、一般大衆をひきつけてゐることは事実である。これは大衆が過去とか未來とかを求めようとする漠然とした心理に反して、次第に現世に中心を置いて物を考えようとする傾向が強くなつて行つた為であり、此の大衆の心にマッチしたのが即ち新興宗教である。

従つて新興宗教にとつて現生利益は唯一のものであり、若し現生利益を抜き去つたら新興宗教は存在することが困難になるであろうと云つて、敢て過言ではないと思ふ。其の一つの現れとしては、彼等に依つて刊行されてゐる新聞・雑誌、及び法話（座）等の内容は其のほとんどが、病氣を中心としてあらゆる災害から難をまぬがれた体験談によつて大部分が占められてゐることである。又更に進んでは貧困であつた生活状況が、忽にして裕福に転向して行つたと云う種のものであり、此等の現世に於ける眼前の利益を旗印として、大衆の心に根強く食い込んで行つたのであ

る。これは現世のすべてに失望し切つてゐた大衆にとつては、非常な魅力であつたに違いない。然も此等新興宗教の主なもの、本宗と關係を持つものが多いのであり、何れも日蓮聖人を立て法華經を誦誦するところの団体である。そこで、是れより日蓮聖人は果して此の「現生利益」の問題を、どのように取扱はれておられるのであろうか、と云うことに就いてこれを御遺文の上から觀察して行こうとするのであるが、然しそれに先き立つて「現世」が如何なる位置にあるかの觀察を試みよう。

二

仏教の目的とするところは云うまでもなく、仏に成ることをもつて最高のものとしてゐる。即ち信仰に依る利益の究極も又そこに在るのであるが、此の見方については尚大別して二つの立場が古來から主張されてゐる。其の一は現世を穢土苦界として、此土では修行が困難なるが故に、弥陀の願力に依つて淨土往生を求め、そこで成仏の修行を行はうとする考えのものと、又もう一つは逆に此の現実の世界に於て、仏への直道たる法華の經力に依つて頓に仏身を成就しようとする考えのものとである。然して、前者は念仏による淨土往生の思想であり、現世を否定するニヒリズムにして、現実遠離の建前であるのに対し、後者は娑婆即寂光の思想に立脚して、あくまで現世に中心を置き、即身成仏をもつて其の目標としてゐるところのものである。同じく成仏と云うところに最高の目的を持ちながら、此のように二つの異つた考え方が在り古來から其の間の優劣がやかましく競はれて來たのであるが、而し究極の目的を來世に持越さずして、現実の上を実現しようとする後者の立場の方が一步優先であり、且つ仏教本来の在り方は、前者よりもむしろ後者の方に、より深い意義を持つものであることは、釈尊の生涯に照し合せて見ても明らかである。(註1)

然して、日蓮聖人の出世せられた当時の仏教界は、阿弥陀信仰が盛んに流布してをり、「日本国の王臣一同の念仏を称え」てゐた時代であつた。此の時に忽然として法華信仰による即身成仏の思想を展開せられたのは宗祖唯一人であつたのである。即ち袋が穢いからと言って中の黄金を捨てるわけには行かないのであり、宗祖は最初から現世に重きを置いて、当時の国土が天変地天・飢饉疫癘などに困り、穢土と化して民衆の苦痛日々を増大し、遂には国が將に滅亡しようとするに及んで、其の原因を究明して立正安国論を幕府に献白し、以て国家の安穩を計り、娑婆即寂光の理想実現にあてられたのである。所謂、来世の成仏を予約することに終始せる宗教を排斥し、先づ現世の国土を救済して、大衆に得益せしむべきであることを主張され、それには即身成仏の教法たる法華の信仰以外には直接の方法は無いとし、此処から忍難弘経の生涯が始められたのである。まことに宗祖の娑婆即寂光説は、浄土仏教のペシミズムによつて否定された現実世界の意義を回復した点に於て、すぐれたものと言はなければならぬ。

さて、以上のことから宗祖の宗教に於ては「現世」と云う事柄が、其の根底に在つて極めて重要な意義を持つものであることを、一応考慮に入れて、これより現生利益の問題を考察してみよう。

三

釈尊が法華經に於て、末法で此の經を受持するものを讚美し、弘経の土を募り、其の功德の甚深なることを強調してゐる如く、宗祖もまた此の法華經（特に題目）を信受する者の功德得益を述べる点に常に中心が置かれてゐる。例へば宗祖の初期に属する撰述たる聖愚問答鈔に因ると、

只南無妙法蓮華經とだにも唱へ奉らば、滅せぬ罪や有べき、來らぬ福や有べき、真実也。甚深也。是を信受すべ

し。(三八六)

と説かれてをり、総て八萬の法蔵も法華經の一部八卷もみな釈尊が神力品に於て結要付囑せられた法体たる妙法五字を顕説する為のものであるとして、其の受持の功德に及んでゐるのである。即ち「滅せぬ罪や有べき、來らぬ福(さいはひ)や有べき」の文の中で、初めの「滅罪」は過去の罪障が現在に於て消滅すると云うのであり、後の「來福」は未來に予定された「さいはひ」を現在に招來すると云うのであって、何れも過去・未來の因果をしてこれを現在の上に得益せしめようとする意圖のあることが知れるのであり、此処に「現世」を中心とする宗祖の宗教に於ける特色の一端を窺うことが出来ると同時に、既に此の問題は初期の頃から一貫した思想として宗祖の内に存在した物と思はれるのである。又更に此の間の事情を明確にした御書に上野尼御前御返事があるが、それに依ると妙法と蓮華との關係を述べる段に於て

蓮華と申、花は葉と花と同時也。一切經の功德は先に善根を作て後に仏とは成と説。かゝる故に不定也。法華經と申、は手に取れば其の手やがて仏に成り、口に唱ふれば其口即仏也。(一、八九〇)

と説いて蓮華の花実同時なるが如くに、法華經を受持する者は因果同時にして、直に仏果を成ずるのである。即ち一般に考えられてゐる如くに、先づ現實に於て行因を修し了つて後に當來の世に赴き、そこで初めて仏果を成ずると云う來世欣求的なものではなくて、手に取れば其の手が、口に唱ふれば其の口が『即仏』となると云うのであるから、特に來世を期待する必要は全く無いわけである。即仏とは此の場合、現實の身上に即して其のまゝ仏を成ずると云うことであり、此の意味からすれば「無作の仏」と云うことゝ等しいわけであつて、所謂、即身成仏門につながるどころの現生を尊重する所以が此処にあると云える。若し然らば、祖文の如く前因後果の淨土門につながる諸經の

立場にたつ時は仏果は「かゝる故に不定也」として、因の種子がいつも必ず大花を開き結実するとは限らない旨を明かにし、是れに反して花実同時の蓮華に在っては、仏果は決定して無有疑なることを主張せられてゐるのである。故に弘安元年七月に同じく女性である妙法尼御前に宛て出された祖書には、妙法尼が法華經について不審の点を尋ねて来たのに対し、それに答えられて

此經の題目は習と誦と事なくして大なる善根にて候。悪人も女人も畜生も地獄の衆生も十界ともに即身成仏と説カれて候（一、五二八）

とあって、即ち題目の大なる「善根」とするところは、相対的な善悪・仏凡を超越した絶対的な十界皆成にあるのであって、而も此の場合には十界の当体に即してそのまゝの姿に仏果を成ずるのである。所謂、即身にして、これは「未來に」と云うのではなく、「現実に即して」と云う謂に外ならない。故に右の文に先き立って題目が法華經一部の肝心であることを明らかにし、更に「朝夕御唱候はゞ正しく法華經一部を真誦にあそばすにて候」（註2）と説かれてゐるのである。これは即ち唱題成仏の基本とするところであつて、宗祖に依れば題目を三業に唱ふれば其の身三業の成仏にして、一遍唱ふれば一遍の仏、三遍唱ふれば三遍の仏であつて、乃至百遍千遍唱ふれば百遍千遍の仏であり、朝夕唱ふれば朝夕仏を成ずるとなすのである。而して三業不退に受持の一行を修することに因り、遂には仏果不退の位に到達することを得ると云う理が成立するのである。

四

斯くして宗祖の現實に中心を置く即身成仏の法門は、常念常作の唱題受持に因るものであつて、時々刻々の得益を

意味するものである。これは宗祖が三世に於ける利益の中で『成仏』を唯一の目標となし、是れ以外の得益はすべて無益であるとして、「日蓮は今生に願ひなし、たゞ仏にならんと願ふばかりなり」（註3）と述べられている如く、仏にならんと欲する以外に他の利益を敢えて求めようとはせられなかつたのであって、「自他共に救はれんがため」の求道と救済の爲のものであつたのである。即ち今生に於て仏の守護を蒙り、来世に於て得益すると云う消極的な利益に対して、其の来世の得益（仏果）を今生に成就せしめようとした積極的な態度に、宗祖の宗教の特徴が在ると云えるのであり、たゞ仏にならんと欲ふ以外には、今世に於て他の何物をも欲しないと云う所以がこゝに存するのである。

また宗祖は国土についても此の現生の国土の上に、そのまゝ仏国土を建設しようとする娑婆即寂光の法門に中心を置かれてゐるのであり、例えば弘安四年の南条兵衛七郎殿御返事によると

かゝる不思議なる法華經の行者の住処なれば、いかでか靈山淨土に劣るべき。法妙なるが故に人貴し。人貴きが故に所尊シ。と申スは是也。神力品ニ云ク、若於林中若於樹下若於僧坊、乃至而般涅槃云云。此砌に望まん輩は無始の罪障忽に消滅し、三業の悪転じて三徳を成ぜん。（一、八八四）

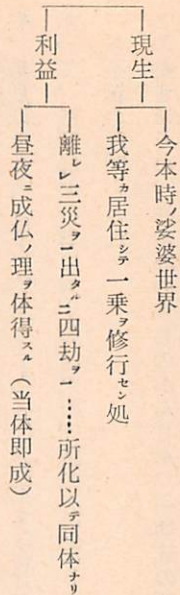
と説かれてゐる如く、法華經の行者の住する処であれば、たとえ何処であつても靈山淨土に劣らない尊貴の場所となし、而も此処に住する輩は、皆無始の罪障を消滅して、三悪を三徳に転向することを得ると云うのである。つまり正報・依執共に現生に在つて仏果を体得するのであって、換言すれば「我等が居住して一乗を修行せん処は何れの処にても候へ、常寂光の都たるべし。我等が弟子檀那とならん人は一步を行かずして天竺の靈山を見、本有の寂光土へ昼夜に往復し給ふ事、うれしいとも申ス計り無し」（註4）と云うことであつて現生を一步も出ずして昼夜に靈山往詣

をなすと云うのであるから、これは前述の朝夕題目を唱ふれば、朝夕仏を成ずると云うのと同一の意であらう。つまり、宗祖は、煩惱や罪悪の世間の中に、人生至上の目的や救済を發見しようとする、現実肯定の人生觀と世界觀とを持ってをられたのである。

依之觀是、宗祖の現生に於ける利益の中心は依正同時の成仏に在るのであるが、其の在り方は「大事の法門をば昼夜に沙汰し、成仏の理をば時々刻々にあちはう」（註5）のであって、所謂、此処で云う大事の法門とは法華經の題目受持を指すのであり、成仏の理とは現生を離れず吾々の当体に即して仏果を得るの理を意味し、其の理を時々刻々にあちはう体得すると云うのである。故に本尊鈔には

今本時娑婆世界離三災一出三四劫常住淨土。仏既過去不滅未來不生。所化以同體。（七一二）

とあり、此処に宗祖の現生利益に於ける究極を窺うことが出来るのである。



五

如是、当体即成が現生利益の究極ではあるが、此れについて重要な問題として「守護」と云う事がある。即ち宗祖の現生利益に於ては上述の如く、「仏になる」ことが無上唯一の問題としてとり挙げられてゐるのであるが、これに

附随した問題で等閑にふすことの出来ないのが、現生に於ける「守護の利益」である。この問題は特に新興宗教にとつては不可欠のものであつて、是れに中心が置かれてゐるのであるが、宗祖の場合はあくまで「仏になる」ことの附随した問題として扱はれてゐるのである。即ち先づ開目抄には

法華經をだにも信仰したる行者ならば（諸天）すて給ふべからず。譬へば幼稚の父母をのる、父母これをするや。梟鳥母を食ふ、母これをすてず。乃至畜生すら猶かくのごとし。大聖法華經の行者を捨ッべしや。（五六三）

とあつて、法華經の行者に対する諸天の守護の必定なることを明かし、更に建治元年八月妙心尼に宛てられた御書には、曼荼羅の説明をされて

この御まほりは、法華經のうちのかんじん、一切經のげんもく（眼目）にて候。たとへば、天には日月、地には大王、人には心、たからの中には如意宝珠のたま、いえにははしらのやうなる事にて候。このまんだら（曼荼羅）を身にたもちぬれば、王を武士のまほる（守）がごとく、子ををやのあいするが如く、乃至一切の仏神等のあつまりまほり昼夜にかげの如くまほらせ給ふ法にて候。（一、一〇五）

と述べられてをり、曼荼羅を「まもり本尊」の意として、法華經守護の一切の仏神が来集して昼夜不斷に守り給うと云うのであるから、現生に於ける守護の利益の如何に甚深であるかが窺えるであらう。而も此の利益は難行道を修了つて後に得られると云うのではなく、末法の今時に法華經の題目を受持しさえすれば、所謂、法華信仰の徒たる者は直にかゝる守護の得益を蒙ることが可能であるとすのである。故に「行者は必々不実なりとも、智慧はをろかなりとも、身は不浄なりとも、戒徳は備へずとも南無妙法蓮華經と申さは必々守護し給へし。袋きたなしとて金を捨る事なかれ」（註6）とある如くであつて、其の身は必ずしも忠実聰明であり清浄にして戒律堅固でなくとも、妙法受

持の功德に因って諸天の守護は必定であると為すのである。而して是れを更に明確に表示せられたのが、所謂本尊抄に於ける

守ニ護ニ此人一大周公撰ニ扶成王一四皓待ニ奉惠帝一不レ異者也。(七二〇)

の文にして、此処で云う「此人」とは「末代幼稚」のことであり、前の御書の「行者」に当る言葉であって、結局は今時に於ける法華信仰の徒を指し、広く一般を名づけたのであると思う。

さて、次にもう一つの現生利益について考察するに、それは法華經の行者を供養することに依って得られる利益である。これは先きの受持に因る「守護」の利益よりも、些か積極性を持つものであり、法師品には仏滅後には是の經を受持する者の功德を讚歎して

有レ人求ニ仏道一而於ニ一劫中一合掌在ニ我前一以ニ無數偈一讚。由ニ是讚仏一故得ニ無量功德一。歎ニ美持經者一其福復過レ彼。

と説かれてをり、宗祖は此の經文を解説されて「一劫が間教主釈尊を供養し奉るよるも、末代の浅智なる法華經の行者の、上下萬人にあだまれて餓死すべき比丘等を供養せん功德は勝るべし」(註8)として、当時の上下萬民からあだまれし宗祖にとつては、將に此の一文は当身の問題としても考へられたことであらう。所謂、無量劫の間に數多の諸仏をして無数の財を用い、供養讚歎するよりは濁世の法華經の行者を供養した方が其の福復彼に過ぐると云うのである。而も是れは又松野殿御書に依ると

此の法華經並に行者を用ひずして、身をそんじ、家をうししない、国をほろぼす人々、月支・震旦に其数をしらす……行者をにくむ国あれば……いくさをこり他国より其国を破るべしと見へて候。(一、一四二)

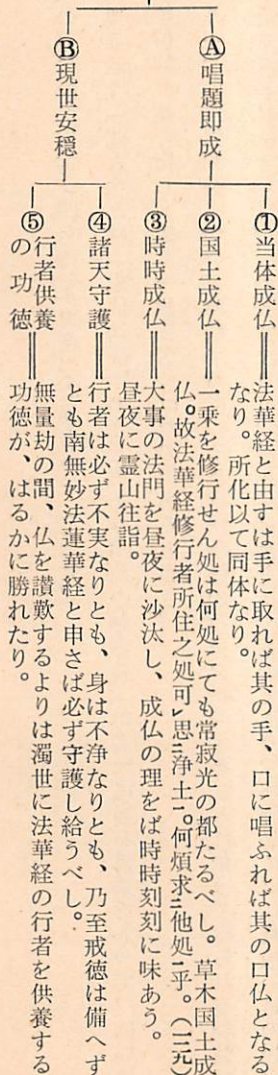
とあるに依って判る如く、逆に行者をにくんだ場合には、単に其の功德を失うと云うにとゞまらず、身を損じ、家を

無くして遂には内乱外攻を招来し、国家をも滅びると云うのであるから、個人の利害だけではなく国家・社会に迄影響を及ぼすことになるのである。つまり行者を供養する功德の甚深であるのに比例して、行者を謗った場合の罪果も又甚深であるのであり、以て此の問題が如何に重く視られてゐるかゞ知れよう。而も宗祖は開宗以來値はれた幾多の迫害と、正嘉元年の大地震・翌二年の大風雨等の天変地天とを回顧されて、これを仏使として末法に妙法を流布せんとする本化の行者を謗った為に起つたものであるとして撰時抄には

日蓮は閻浮第一の法華經の行者なり。此をそしり此をあたむ人を結構せん人は閻浮第一の大難にあうべし。これは日本国をふりゆるがす正嘉の大地震、一天を罰する文永の大彗星等なり。(一、〇一九)

と明らかに現生の天変地天は悉く法華の行者(特に爰では宗祖自身)を迫害する為に「当世日本国は一切衆生」は、かゝる大難を蒙るのであるとし、仏使としての本化の自覚に立つて此の言明がなされてゐるのであり、將に宗祖当身の問題として取り扱はれてゐることが知れ得るのである。

現在利益



以上の所論をまとめて見ると、大体右の図の如くなるのであるが、此の中で①の系列は、『仏にならんと願う以外に更に願なし』とする宗祖の願う利益得果の究極にして、蓋し仏教の根本問題とするところである。また②の系列は①に因つて必然的に派生されるのであつて、謂はば附随した問題として考えることが出来るのである。而し附随とは云え特に③は①と同様に重く視てをり、末法の法華經行者を供養することの功德が如何に他の功德よりも勝れているかと言ふ点に就いては、枚挙にいと間なき程御書の隨所に強調してをられる。次に④は題目受持に因つて諸天の守護を蒙り、現世安穩を期待するのであるが、一般には兎角誤解され勝であつて、特に新興宗教に於ける唯一の目標として掲げられ、やゝもすると迷信的に傾き、或は利己的な解釈がくだされて宗祖本来の意味を失う場合が少なくないのである。つまり④は①の系列に附随するのであつて、④だけが独立して存在しそれが中心目的とする得益ではないのであり、宗祖の場合はいくまで①に中心が置かれてゐるのであることは既に前述せしところである。してみると④に中心を置く現代の新興宗教は、單なる現世利益の信仰を旨とする団体であつて、其の根本たる①を毫毛の軽きに置いてゐるの感が強いのである。もとより②は①によって派生されたものであつて見れば、①を軽くして②の④に重きを置くと云うのは主伴転倒であつて、恰も水中の月を探ぐるに等しいものと云うべきであらう。所謂、此処に兩者の根本的相違を窺ふことが出来るのであつて、④のみに拘泥し、此れをどこまでも演釈して行こうとする在り方は遂に迷信的「神がかり」となり、宗祖の本意に背くばかりでなく仏教本来の在り方から遠離するものと云える。

次に①の系列について見るならば、先づ①は、現生に於て法華經の題目を受持することによって得られる利益の中

では無上究極のものである。又此の①によって必然的に②の依報国土も娑婆即寂光の土と化し、一步を出ずして仏の国土に住するを得るのである。而も此の即身成仏の理を時時刻刻にあじあうと云うのが③の眼目とする処であって、此処に宗祖の現生に於ける利益の法門の特色が如実に現されてゐるものと思うのである。所謂、①と②の正依二報の成仏は、結極③の「時時刻刻に味あう」と云う在り方で具体的に示されてゐるのである。

斯くして、宗祖に於ける現生利益の問題に就いての一応の考察を試みたのであるが、勿論宗祖は現生ばかりの利益を説かれることにのみ終始したのではなく、後生善処の問題に就いても教示せられてゐるのであるが、本稿に於ては現世を中心を置いたので、後生の問題には此処ではふれないことにしたのであつて、此のため宗祖が後生を軽く扱はれたと云うのでは決してない。娑婆即寂光を主張せられた宗祖は単なる現世主義者ではないのであり、現世や現身の實在を認めると同時に、過去・未来にわたつても其の實在を承認してゐたのである。然し、何れに中心をかけられただか、と云うとやはり宗祖は現世に在つたと云えるのである。それは宗祖が世に出られた当時の宗教界は、上述の如く浄土往生の念仏信仰が風靡してをった時で、後生欣求の思想に左右されていたのである。従つて此のようなベシミズムの盛んな時に出られた宗祖は「現に今生き乍らただ一途に死後の往生のためだけの念仏称名するのだとせば、そも／＼この世の生存の意義は果して何であらうか。この社会現実はいかに苦くとも生きぬいていくだけの価値はないのだらうか。」(註9)と云う根本的・現実的な問題に直面し、其処から出発して一切経を繙き、遂に法華経の信仰に因る唱題即成の法門を掲げるに至つたのである。故に宗祖は後生を求めて一途に往生を念じて現実を離れようとしたのではなく、又逆に、現実の利益のみを目的として諸天の守護を頼み、徒らに奇蹟現象を願つたのでも勿論ない。ただ宗祖がひたすらに求められたのは、今生に於て「仏にならん」と願うことと「諸人をして仏道に入らしめん」と

する大願以外には更に何ものもなかったのである（註10）。同じく『現生』を中心に置きながらも、新興宗教のそれの如く、眼前の利益の爲にのみあらゆる災難から脱れようとして、敢て根本の問題を軽視する行き方とは大きな懸隔があることをそこに見出すことが出来るであらう。

『註』

① 釈尊の生涯は衆生の救済に中心が置かれたのであって、即ち十九出家より三十成道に至るまで行因を重ね、菩提樹下に在って遂に正覚を成じられたのである。所謂、現生に於て行因得果せられ、衆生に其の範を垂れて同時に八十入滅まで救済の爲の教法が説かれたのである。即ち釈尊の根本思想は決して現実生活の否定ではなくして、現実生活をけがし、ゆがめる人間の利己心（欲望・煩惱）の否定であったのである。

② 妙法尼御前御返事 定遺一、五二七

③ 四条金吾殿御返事に云く「日蓮は少（ハカキ）より今生のいのりなし。只仏にならんとをもふ計也。」（定遺一、三八四頁）とあり、更に此の文を守護国家論の「法華經修行者所住之處可レ思淨土。何煩求他處乎」（一二九）の文と照合してみると、宗祖は今生に在って只仏となり仏国土を此の世界の中に実現しようとせられたことが窺えるのである。而も宗祖にとって此の問題は究極の理想とするところであったのである。

④ 最蓮房御返事 定遺六二四

⑤ 同 定遺六二四

⑥ 祈禱鈔 定遺六七九

⑦ 大正大藏經 九ノ一ノ三一

⑧ 松野殿御消息 定遺一、一四一

⑨ 日本仏教学会年報 第二十二号 一六六頁（三二・三・二五発行）

⑩ 四条金吾殿御書に云く「一切衆生南無妙法蓮華經と唱ふるより外の遊樂なきなり。乃至、遊樂とは我等が色心

依正ともに一念三千自受用身の仏にあらずや。法華經を持し奉り外に遊樂はなし。現世安穩・後生善処とは是なり。」(定遺一、一八一頁)とある如くである。而して宗祖の宗教に於ける現生利益の問題は、現実の世界に住しながら徒らに來世のこのみを想い、それを追い求めようとする非現実的なものではなく、又只単に現世の欲望を満足させんが為のものでもない。結極宗祖は法華の信仰に困って、我等が色心依正ともに現実の世界に即して、仏果を成じようとせられたのであり、此処に其の特色が存するものと云えるのである。病災等の諸難からまぬがれ、財福を得ようとする眼前の欲望にのみ基いて行はれる信仰は、如上の意味から考へる時に新興宗教にとっては唯一であり、民衆にとっては非常な魅力であるとしても、果してこれが聖意に叶うものであらうか。(三二・九・一〇)